

「自然のささやきに身をひたす幸せ」

「自然誌科学館」の開催、おめでとうございます。

すっかり、お馴染みになり、この「自然誌科学館」の話が伝わってくると理学部に夏が来たと感じるようになりました。同時に脈略もなく思い浮かぶのは40年もの前、まだ木造の二階建てが2本あったころのこと、その校舎の南東のちよとした草地にあんずの木があって、その実をバケツに山盛りに取って食べたことです。夏の暑い日、太陽に焙られあつたまつた、あんずの実を口にしたときの広がる香りを思い出します。そして、思い出と連なる、しかしその時のことだったのかさえ曖昧なこともまじえて、いろいろなことが浮んできます。

単になつかしいというだけでなく、そうしたことの蓄積が、物を見、考える判断の基準を横から支えているような気がします。

今年のお題は「自然のささやき」とのこと。風や水の音、草の実のはじける音、新雪のにおい、林の静寂と「ささやき」という言葉からさえ多様な「ささやき」が伝わってくる気がします。

今年の「科学館」に参加されたすべての人に新しい発見があり、そこで「自然のささやき」をそれぞれにいつそう深く感じられるならどんなにすてきなことでしょうか。

今年も「自然誌科学館」が豊かな催しとなりますよう願っています。

準備され、運営されているスタッフの皆さんのご努力に心から敬意を表します。

2006. 6. 29

森 淳

信州大学理学部同窓会長